広報九州

平成２６年２月１０日
（２０１４年）
No　１７０５

九州森林管理局
〒860-0081
熊本市西区京町本丁２－７
IP電話 050-3160-6600(代表)
http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/

森林共同施業団地の現地検討会を開催

～民有林協定者の参加を得て２ブロックで開く～

九州管内には、22箇所の森林整備推進協定が締結され、このうち20箇所に森林共同施業団地が設定されています。

森林共同施業団地の取り組みを推進するため各署では、定期的に運営会議を開き、事業結果の検証や事業計画の打合せなどを行っているところです。

今回の森林共同施業団地の現地検討会は、地域の森林・林業の活性化などに向けた、民・国連携した森林共同施業団地の取り組みの充実化を一層推進するため、民有林協定者の参加を得て九州管内を北部ブロック（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分県）と南部ブロック（宮崎、鹿児島県）の２ブロックに分けて、①各団地の取り組み事例の紹介、②各団地の民・国連携した取り組みの進め方について民有林協定者と意見交換及び発表、③民有林協定者の取り組みの情報提供を主な内容とし、北部ブロックは熊本県五木団地で、南部ブロックは北諸県・田野団地で現地を視察し、各署から各団地における取り組みの事例紹介を行い、自署の団地で取り組みの参考事例とするとともに、民有林協定者と今後の取り組みの進め方について意見交換することによって取り組み内容の充実化に少しでもつなげたいとの目的で開いたものです。

設定された施業団地の現地にて検討を行う関係者

今回の参加者は、２ブロック合わせて総勢80人余りでしたが、このように一同が会する現地検討会は初めてのことであり、他署の団地の取り組みや課題などについて民・国で共有することができました。各署の具体の取り組み内容としては、路網の連結による森林整備事業の効率化を図っている団地や、国有林の安定供給システム販売へ参加して協調出荷による安定供給を図っている団地の事例、路網の現地検討会や採材研修などを開き技術交流、人材育成に取り組んでいる事例などが各署から紹介され、今後の団地の進め方を検討する上で大変参考になるものと考えています。

また、民有林協定者の取り組みについて、神埼市の吉田稔氏、森林農地整備センター熊本水源林事務所の佐田武信氏、日本製紙木材の山本敏博氏、南那珂森林組合の清水賢次氏、及び株式会社宗の宗誠氏から情報提供を受け、民有林の取り組み状況について理解を深めることができました。

民有林協定者の事例発表

今後は、この現地検討会で得たものを活かし、自署の団地において、路網の連結やシステム販売への参加及び技術交流など取り組みの成果が出せるものから順次取り組んでいき、地域の優良モデルとなる施業地の設定や地方公共団体、及び団地周辺の民有林所有者などに向けた森林共同施業団地の普及の推進を図るとともに、団地周辺の民有林所有者情報及び集約化情報の収集を行い、森林共同施業団地の設定箇所数の増加、団地の区域面積の拡大、協定参加者数の増加に繋がるような取り組みを強化し、民・国連携した森林共同施業団地の取り組み内容の充実化に努めていくことが重要と考えています。

（担当＝計画課
流域管理指導官）

自署の名山

福岡森林管理署
新宮森林事務所
森林官　稲員　優次

福岡市東区と新宮町、久山町の境界に位置し、標高３６７㍍の低山で多くの方々にハイキングで親しまれている立花山を紹介します。

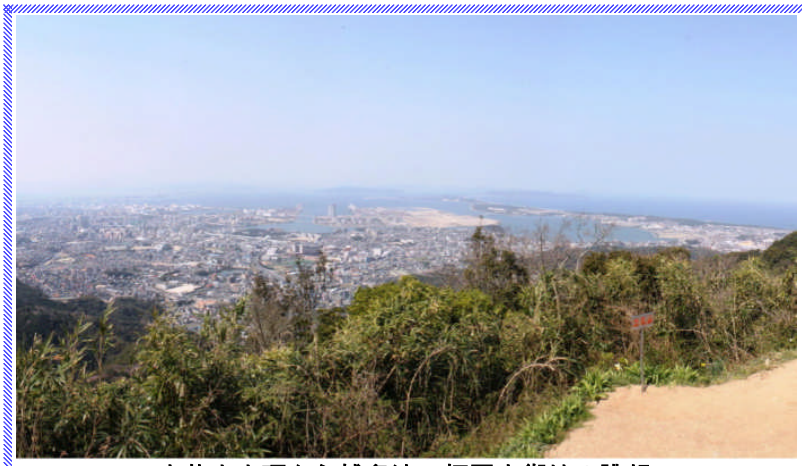
立花山はイザナギノミコトとイザナミノミコトの２つの神を祀る山として二神山（フタガミヤマ）と呼ばれていました。８０５年唐から帰国した最澄（伝教大師）が、唐から持ち帰ったシキミの杖を岩に立てかけていたところ、先端から根が生え、上の方からは枝葉が茂り、花を咲かせたことから立花山の名が付いたと伝えられています。

１３３０年に大友貞載が福岡市東区・新宮町と久山町の境界に位置する山頂部一帯に筑前支配の拠点のひとつとして立花山城（立花城）を築きました。

１６００年、関ヶ原の戦いの後に黒田長政が入国すると、福岡城を築城し石垣が移築されたため、１６０１年に廃城となった現在では数カ所に石垣が残っており、古井戸、屏風岩、夫婦杉などと共に登山をする人々の目を楽しませてくれます。

また、登山道から少し入ると、クスノキの原生林があり、「立花山クスノキ原生林」として昭和３年に国指定天然記念物、昭和30年に特別天然記念物に指定されています。この中には樹齢２００年を超える樹高30㍍に達するものが６００本程あり、クスノキの自然林としては本国唯一とも言われています。また、平成12年には林野庁が公表した「森の巨人たち百選」に選ばれています。

福岡市内から車で登山口まで30～40分、いくつかの登山ルートがありますがいずれも登山口からでも40～50分で頂上に至ります。３６７㍍の低山ながらも眺望は他の山に引けをとらず、玄界灘から海の中道を挟んで博多湾、福岡市街を一望できる景色は絶景です。



立花山山頂から博多湾・福岡市街地の眺望

広く市民に利用されている立花山山頂

「森の巨人たち百選」に選ばれた大クス

廃城となって残された石垣

森のセミナーを開く

【熊本南部森林管理署】本年度第４回目の「森のセミナー」を開き約30人が参加しました。環境省希少野生動植物種保存推進員の乙益正隆氏を講師に、「ウマの名前を持つ植物方言」と題し講義を受け、馬と人間と植物のつながりの話や、先人の知恵を後生に伝えていかなければならないことを学びました。

午後からは、シダ植物の培養方法について実習を行いシダの胞子を歯ブラシや竹串を使ってヘゴの台木にふりかけビニール袋に入れ持ち帰りました。シカの食圧により生物多様性への影響が広がっていますが、今後、培養したシダを国有林に移植して再生していくことにしています。

真剣に実習に取り組む受講者＝熊本南部

第1回 奄美群島森林生態系保護地域保全管理委員会を開催

1月20日に鹿児島県奄美市において、第1回奄美群島森林生態系保護地域保全管理委員会（以下「委員会」という）を開きました。

「奄美群島森林生態系保護地域」は世界でも限られた地域に成立する亜熱帯性常緑広葉樹林などで構成され、アマミノクロウサギをはじめとする希少な野生動植物が多く生息・生育することから、平成25年4月、奄美大島と徳之島の国有林野計4820㌶を設定しました。

委員会は学識経験者や地元自治体、観光関係者、地元NPOなどで構成し、保護と利用を両立させるための指針を策定することを目的として設定しました。

第1回委員会では、座長に米田健鹿児島大学名誉教授を選任し、保全管理をより効果的に進めるための課題の抽出を行いました。委員からは、主要観光地への車両乗り入れ制限、動植物の持ち出し規制強化、観光客の一極集中回避のための他地域への誘導などが検討課題として挙げられました。

第2回委員会を9月に予定しており、「奄美・琉球」の世界自然遺産登録へのスケジュールを踏まえながら、平成27年12月に保全管理計画を取りまとめる予定としています。

（担当＝計画課）

第１回委員会を開催＝鹿児島県奄美市

初めての国有林を視察

【長崎森林管理署】南島原市林業振興会西有家支部から長崎県島原市振興会への依頼で、管内の国有林及び私有林内において、島原市、雲仙市、南島原市、雲仙森林組合の担当者が参加し林業現地視察研修を行いました。当署からは国有林の業務について説明の後、午後からは集材現場の様子を見学。最後に、雲仙森林組合から事業の説明が行われ終了しました。初めて国有林の視察ができ、参考になったとの声もあり、これを機にそれぞれの森林施業がより良いものに繋がっていけばと思います。

国有林の現地で説明を受ける関係者＝長崎

ちょっと一言

「森林再生をめざして」

長崎県東彼杵町

町長　渡邉　悟

本町は、長崎県のほぼ中央の波静かな大村湾の東側に位置しています。総面積7425㌶のうち、約60%にあたる4027㌶が森林面積となっています。

また、国有林野775㌶の植林も時代を遡れば江戸時代から現在まで行われています。併行して木炭の生産が行われていますが高齢化の影響で生産量の減少が進んでいます。

学校林での植林などの取り組みも子供達を交えた取り組みが今もなお継承されています。

戦後間もなく植林事業が盛んに行われ、国有林、県有林、町有林そして私有林で、約40%は植林によるものであります。

戦前から各集落で杉や桧の植林化が積極的に進められ、そして計画的な森林計画で収益を上げ、集落内の下水路整備などスローな公共事業が平然と行われていました。住民と森林の関わりは、エネルギー源の変遷とともに、時代は変わりました。

今日の林業を取り巻く環境は劣悪で、伐期を延ばしながらの政策なしの状態でいつの日か来るだろうと思いつつ林業の再生を待ちわびていました。

過疎化の進む山村に森林資源をどのように活用するかが今後の大きな課題であります。木材を代替エネルギー源として、木質バイオマス、ペレット材として、また、最近では集成材のCLT（クロス・ラミネイティッド・ティンバー）建築材料など、多くの用途があります。

オーストリアではエネルギーの30%を再生可能資源によって賄っており、過疎の村が木材産業と、そこから出る端材や木くずを活用してバイオマス発電と地熱の供給で、1000人の雇用と健全な財政を創出した事例もあるという。

これからの成長戦略に併せた森林再生に大きな期待をいたします。

地域のイベントへ参加

【鹿児島森林管理署】毎年、地域のイベントとして開かれている「森林のまつり」が霧島市溝辺町において開かれ、当署からは、「かずら細工作り」、「竹とんぼ」、「どんぐりクラフト」作りを担当。当日は、天候にも恵まれ、大勢の家族連れや森林に興味がある人などが多く訪れ、「かずら細工」の作り方などについて職員が参加者一人一人に丁寧に指導。参加者は、かずらの大きさなどを吟味しながらアンティークな手作りの小物作りに奮闘し、出来上がったオリジナル作品に感慨深く、お土産として持ち帰っていました。今回のイベントで森林の恵みによるお土産を十分にアピールできた一日でした。

かご作りの指導を受ける参加者＝鹿児島

国有林の技術を提供

【熊本南部森林管理署】球磨地域振興局主催による「森林経営計画等に関する学習会」が関係市町村や森林組合、林業事業体の担当者約50人を対象に開かれ、当署の担当者が講師として参加しました。午前中は、振興局会議室において森林経営計画における森林作業道の整備などについて座学が行われ、国有林における森林作業道作設の考え方や原木の安定供給に資するシステム販売などについて当署担当者が講義を行いました。午後からは管内国有林の活用型保育間伐実行箇所において、効果的・効率的な森林作業道作設について現地検討会を行い、森林作業道を開設したオペレーターによる現地での説明があり、参加者からは今後の業務に役立てたいとの意見も聞かれるなど国有林が取り組んでいる低コスト化の技術情報を普及するよい機会となりました。

現地で指導を受ける参加者＝熊本南部

モニターの声

横光　陽子さん

里山・防風林が身近になることを願って

大分県中津市には青の洞門や深耶馬溪の岩と松は切り離せない景勝地があります。海岸には立派な新田の松林が広がっていましたが松枯れにより壊滅状態です。松くい虫対策に日本の松食い虫対策予算の10分の1に当たる7億円が延々30年近く農薬空中散布を続けてきましたがほぼ壊滅しています。途中で費用対効果や農薬汚染の影響などを考え、見直しをする必要を強く感じます。

新田の松林は、県、市の林業水産課・地元・市民グループの共同作業で10年間下草刈りと土壌改良をした結果その場所のみ老松が残っています。宇佐市乙女海岸での松は枯れたが、立派に自然林が防風林として育ち、渡り鳥の安住の地となり子ども達の自然体験の場となっています。

温暖化や酸性雨の被害で生態形も変化しています。地球や人など生き物に優しい森林づくりに林野行政の面からもっと国民を巻き込み取り組んで頂きたいと願っています。

東北では津波で壊れた海岸の防風林にガレキで盛り土をし、そこに地域で育てた広葉樹を植え将来の津波に対する安全な防波堤につなげようとしている姿に頭が下がります。

又、津波の到達地点を桜並木にして、いつか忘れた頃にやってくる津波から逃げる目標にと植えられた桜の木、思いを込められた木々の成長を遠い地から見守って行きたい。

森や里山を身近に対する樹木葬も考える時が来たのかなと思います。我家のネコが死んだ時庭の杏の木の下に埋葬した翌年、杏の花が咲きほころんだことを思い出しました。

樹木葬は東京や四国の島で行われていると聞きます。自然の循環の輪の中に人間も入っていく実感が身近になり、命がこのまま閉じるのではなく自然に帰る。

超高齢化社会に突入すると後仕末してくれる人がいない人もいます。その地域の方々の理解を得ながら樹木の根元に埋骨することで森や里山の再生に役立ち地球温暖化防止をも助け未来への橋渡しが出来る。その管理費を地元に納め、その基金で森林管理、山守りの人材育成に当てる。

故郷のない人が心の寄り所に通う場所に森や里山が生かされ活用されることは大切だと思う。都会と田舎の交流・田舎の再発見になると思う。教育長や住職さんにも同じ考えの方々がいます。

林野庁の御助言と一押しが欲しいと切に願っています。

（大分県中津市在住）

「シカ被害対策」について九州農政局と連携

シカ被害防止対策ついては、地区ごとに各種対策を行っており、対策を行った地区では一定の効果は見られるものの、全体的な被害は減少していません。

有効な被害防止を実現するためには、森林をすみかとし農地をエサ場として行き来しているシカを、山際（森林と農地が接する地域）において関係機関が密接に連携した対策を効果的に推進していくことが必要です。

このため、九州農政局と九州森林管理局では、鳥獣被害防止特措法に基づく高森・竹田・高千穂地域鳥獣害防止広域対策協議会が設置された地域を「連携モデル地域」として、国有林と農地が接する地区において、地域の実態・要望などを踏まえた具体的な課題、対応策などを検討するために合同現地調査や打合せ会議をこれまで開いており、また、高森・竹田・高千穂地域鳥獣害防止広域対策協議会の現地視察検討会での講演などを行っています。

今後は、九州森林環境シンポジウムでの九州農政局による講演や猟友会との意見交換会を開くことを予定しているとともに、九州地方環境事務所を含めた連携対策を進めることにより、九州でのシカ被害の減少を目指しています。

（担当＝保全課）

現地視察検討会での講演＝熊本県高森町

第19回綾プロ連携会議及び事業説明会を開催

宮崎県綾町役場会議室において、綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画（綾の照葉樹林プロジェクト）第19回連携会議が、関係機関5者など（九州森林管理局、宮崎県、綾町、日本自然保護協会、てるはの森の会）の出席の下、開かれました。

会議は、平成25年度事業進捗状況、森林環境教育基本計画策定の取り組み状況、有識者との意見交換会（案）、綾プロの運営についてなどの報告及び提起がなされ、事務局提案どおり了承されました。

事業説明会は、同日に綾町・高年者研修センターにおいて、地域住民約60人参加の下、綾プロ関係機関5者により「人とつながる綾の森林」をメインテーマに開かれ、宮崎森林管理署の濱田辰広地域林政調整官から「綾の国有林と生活の歴史」と題して、明治から平成までの国有林との関わりを、当時の写真を用いて説明を行いました。

また、後半では参加者による「森林と人との関わりを増やすために」と題してワークショップを行い、今後の綾プロに活かす取り組みが行われました。

（担当＝計画課）

第19回綾プロ連携会議を開催＝宮崎県綾町

森林春秋

民・国アベックで日本一

昨年11月に霧島神宮の山神祭式典に参加した折、日頃からお世話になっている山林課の鎌宮武義さんよりホットな情報。

その情報とは、第52回農林水産祭参加全国林業経営推奨行事に鹿児島県から推薦された霧島神宮有林の間伐箇所が最高賞の農林水産大臣賞になったとのこと。

これまでの鎌宮さんを始め職員の皆さんのご努力に敬意を表したい。さらに話が進み、今回入賞した間伐箇所の実施者は当支署管内の松田林業さんであるとのこと。後日社長の松田春年さん曰く、国有林の現場で都城支署から指導してもらったとおりに実行しただけとのこと。なんと嬉しいお言葉。

一方12月のある日、平成25年度国有林間伐推進コンクールに九州森林管理局から推薦された当支署管内の高崎産業さんの間伐箇所が最高賞の林野庁長官賞（最優秀賞）になったとの連絡が。これにはビックリ仰天。なんと当支署管内の事業体が実施した間伐箇所が民有林と国有林で同じ年度にアベックで日本一になったことになる。

松田林業さんと高崎産業さんのこれまでの技術向上への研鑽とご努力に敬意を表するとともに、我が都城支署の職員の指導やサポートに感謝。

まもなく国有林は一般会計化2年目に突入していくが、これから地域の森林・林業再生に貢献する新生国有林の姿を具現化するためには、我々は勿論のこと国有林で培った高い技術を持つ事業体の皆さんがキーマンであり、自信とプライドを持ってますます地域林業をリードする担い手になってほしい。

（都城支署長　川畑充郎）

第8回 九州森林・林業セミナー開催

去る12月19日、九州森林・林業セミナーが、屋久島世界遺産登録20周年を記念して屋久島の現状などをテーマに開かれ、九州南端の鹿児島市市民ホールを会場としたにも関わらず、総勢152人の大勢の方にご参加いただきました。

開催に先立ち、はじめに川端省三九州森林管理局長から、「今年度のテーマは、屋久島に関するテーマですが、森林の保全と利用に関するテーマでもあります。これからの森林・林業・木材産業は、資源を循環させながら、保全と利用を調和をさせて進めていくことが重要であり、その意味で、今回取り上げたテーマは多くの示唆を与えてくれるものと思います。今年度4月から、国有林は一般会計の下で事業を進めることとなり、公益的機能重視の森林管理と森林・林業の再生に貢献するという大きな2本柱を掲げて取り組んでいくこととしています。これらは困難な課題ですが、ご参加の皆様のご理解、ご協力がなければ実現できないものです。私ども森林・林業に携わるものとして、公益性の担保をはかり、保全と利用を両立させながら、森林林業・木材産業の再生に貢献していかねばならないと考えています。このセミナーがそのきっかけになればと考えています」と挨拶がありました。セミナーでは、4人の方に登壇いただき、始めに国有林から2人、「屋久島の現状と課題について」米田雅人屋久島森林管理署長からの報告、同時期に世界遺産登録された「白神山地の現状と課題について」東北森林管理局から自然遺産保全調整官の相馬勝則氏による報告が行われました。屋久島からは縄文杉ルートの★オーバーユースにより歩道荒廃やトイレし尿処理、山岳部保全募金、入山料徴収問題から、自然環境保全への影響懸念などがクローズアップされているとの報告に対し、白神山地からは、登録後20年が経過し入山者数が減少傾向にあり、違法伐採行為などはあるが、全体として生態系への大きな影響はなく、これからの問題として、シカの侵入、外来種対策、入山利用の問題などがある。入山利用については、新たな管理計画策定の意見聴取の際は、入山規制をもっと緩和すべきなどの声があり、新聞記事も「規制緩和せず」や「入山規制継続」などの表現が目立ち、地域関係者からは、さらに入山者などの誘客を進めたい思いがあるなど分散化を図りたい屋久島の抱える現状とは、異なる思いがあることが報告されました。

その後、講演に移り、まずはじめに、吉田茂二郎九州大学大学院農学研究院教授から、「年輪年代学から見た屋久杉の伐採活動の歴史」をテーマに、講演いただき過去の屋久杉の分布や詳細な年輪解析から伐採の歴史を★俯瞰した報告があり、大規模伐採は1700年半ば頃からあったこと、老齢木の成長やスギの更新は、過去の大規模伐採がもたらしたものなどの成果が披露されました。次に、吉良今朝芳鹿児島大学元教授からは、「屋久島世界自然遺産地域の未来への提言」と題して、遺産登録後の屋久島に関して多くの資料を基に幅広い分析がなされ、登録後の自然環境の変化、環境保全の取組、モニタリング調査への言及、ヤクシカ増加に伴う被害対策の課題、希少種ヤクタネゴヨウの保護などについて語られ、最後に地域の六次産業化を目指すことなどそれぞれについて、貴重な提言をいただきました。このほか、会場内には、国内4個所の自然遺産地域の写真パネル展示（屋久島森林生態系保全センター提供）を行い、多くの参加者に見ていただきましたが、貴重な自然環境がこれだけ保全され、登録されている日本の自然の豊かさと生物多様性が豊かなことを改めて確認する機会となりました。

九州森林・林業セミナー会場と参加者

冒頭挨拶する川端局長

講演する吉田茂二郎教授

講演する吉良鹿児島大元教授

★オーバーユース＝山岳部の利用で使われる用語として過剰利用の意味でさまざまな悪影響が出ていること。

★俯瞰＝全体をうえから見ること

（担当＝計画課
自然遺産保全調整官）

森林・林業の情報を交換

【北薩森林管理署】今年度３回目の北薩地域森林・林業情報交換会が開かれ、北薩地域振興局、さつま町、当署の関係者24人が参加しました。今回は、森林技術・支援センターで開発されたシカ捕獲用の「巾着式あみはこわな」を設置した野平国有林内で器具を改良した網の作成・わなの設置方法などの説明があり、意見交換を行いました。網の中にシカをどのように呼び寄せるかなど、多くの意見が出され意義のあった情報交換会となり、民間においても「巾着式あみはこわな」が普及しシカ被害が減少に繋がることが期待されます。

改良したわなの設置方法を学ぶ参加者＝北薩

平成26年度「国有林モニター」募集

林野庁九州森林管理局では、より多くの国民の皆様に身近な存在として国有林を感じていただけるよう、国有林の役割や現状といった情報をお知らせするとともに、国有林をより「国民の森林」として管理経営していくため、森林・林業や国有林に興味を持たれる一般の方々から御意見をいただく「国有林モニター」制度を実施しています。

この度、平成26年度「国有林モニター」を下記の通り募集いたしますので、多くの皆様からのご応募をお待ちしています。

記

【募集人数】 60人程度

【依頼期間】 平成26年４月～平成27年３月（１年間）

【依頼内容】

・森林・林業、国有林に関するアンケートへの回答
・森林・林業、国有林に関する御意見や御提言などの報告、弊局広報紙への投稿
・国有林モニター会議への出席（年１～２回程度、希望者のみ）

※　提出いただいた回答、ご意見などについては、全体を整理した上で、後日九州森林管理局ホームページにおいて、主要な意見などを匿名にて公表することがあります。

【応募資格】

九州・沖縄８県にお住まいの20歳以上（平成26年４月１日現在）の方で、森林・林業および国有林に関心を有する方。（ただし、国会及び地方議会の議員、地方公共団体の長及び国家公務員は除きます。）

【応募方法】

官製ハガキ又は封書に必要事項を記入の上、以下の宛先まで御応募ください。また、メール及びファックスでも受け付けております。御不明な点につきましては、御遠慮なくお問い合わせ下さい。

〒860－0081
熊本市西区京町本丁２番７号
九州森林管理局 企画調整課　国有林モニター担当
ＴＥＬ：096－328－3511　ＦＡＸ：096－328－3643
E-mail： ky_kikaku@rinya.maff.go.jp

【必須事項】

・氏名（ふりがな）、性別、生年月日、年齢、職業、住所、郵便番号、電話番号、メールアドレス（ございましたら）
・国有林モニターを知ったきっかけ（具体的に記入）
・国有林モニターに応募された理由（100字程度）

※　ご応募いただいた個人情報は、個人情報の保護に関する法律に従い、適正に取り扱います。なお、一度送付いただいた申込書はお返ししませんので、あらかじめご了承願います。

【募集期限】

平成26年２月28日（金）（当日消印有効）

【発　　表】

・選考結果は、平成26年３月下旬頃、依頼状の発送をもってお知らせいたします。
・応募状況によっては抽選による選考をさせていただきます。選考結果に対する個別のお問い合わせにはお答えできませんので、あらかじめ御了承下さい。

【その他】

・国有林モニターになっていただいた方には、弊局の広報誌などを定期的にお送りします。
また、モニターの活動に対して記念品をお贈りします。
・国有林モニターとして個人的に提出いただいた御要望などに関しては、個別にお答えすることはできませんので御了承下さい。
・国有林モニターはより多くの国民の皆様に身近な存在として国有林を感じていただけるよう、国有林の役割や現状といった情報を提供し、併せて御意見等をいただくものですので、既に国有林についてご存じの方（例：国有林ＯＢ、業界関係者、森林林業担当の自治体職員、国有林に陳情などの活動を行われた方など）におかれましては、お断りさせていただく場合があります。

第9回「森林のアートギャラリー」表彰式・除幕式

～入賞した6校の生徒及び保護者等 60人が出席～

「第9回森林（もり）のアートギャラリー」の表彰式並びに除幕式が1月26日10時から、九州森林管理局で行われ、入賞した6校の表彰式を、生徒や指導した先生・保護者ら、約60人が出席し開かれました。

今年は、「豊かな森林（もり）」というテーマで下絵を熊本市内の小中学校を対象に募集したところ、熊本市内の中学校から11校、16点の応募がありました。下絵審査で選考された6作品について10月からアートパネル1・4㍍×4・5㍍の制作を依頼し、各校の完成した力作のアートパネル作品から、最優秀賞1点、優秀賞5点を最終選考し、最優秀賞を九州森林管理局正門右壁、優秀賞を東側ブロック塀に設置しました。

入賞した6校の表彰後、生徒らによるアートパネルの除幕を行い、目の当たりにする展示作品の見事な出来映えに生徒や保護者から歓声が沸きました。

最優秀賞の作品「四季」をバックに

また、これまで展示された作品は、道行く人たちの心を癒し、地域から好評を博しており、今回展示した作品についても自然や森林について考えてもらうきっかけになる事を期待し、今後2年間展示することとしています。

なお、今回の表彰作品は次のとおりです。

最優秀賞

「四季」

熊本大学教育学部附属中学校美術部1・2年

優秀賞（5校）

「命」

熊本市立飽田中学校1年

「共存」

熊本市立楠中学校1・2年

「森林と生きる」

熊本市立桜木中学校美術部1・2年

「泉と森林のもたらす物」

熊本市立清水中学校美術部1・2年

「人と森林」

熊本市立下益城城南中学校2年

（担当＝技術普及課）

⑦⑥ スギ（スギ科）

日本固有の樹木で、ヤクスギは胸高直径が最大で世界遺産に指定された主要な樹種です。年輪は2千年から3千年と数えられ、日本の樹種の最高年輪をマークしています。

スギは古くから植栽され、40年前後で住宅用材（柱）に利用できる育林技術が確立されて、日本で一番多く植栽されています。

スギの名前は、直立して育つことによります。す（直）き（木）の意味で古名はマキ。スギの代用に使われたイヌマキはスギ（マキ）より劣ることから頭にイヌが付いています。

葉がどのように付いているかを調べてみましょう。葉がついている小枝1本を取り、葉枝の上下を指で押さえて、上を右へ捻ってみましょう。葉が3列に並んで付いている状態が観察できます。日光をたくさん受けるため、葉が重ならないように3列の葉が捻れてらせん状についています。

雌花と雄花は同じ株にそれぞれ咲き、雌花（きゅう果）は球形、花粉症の花粉は雄花にしか付かないことを理解しましょう。

熊本に春を呼ぶ「植木市」が開幕した。暖かい風が待ち遠しい。日本経済には一足先に「アベノミクス」という春風が吹き始めた▼一部で景気回復の芽吹きがあるが、我々も体感できる暖かい景気の訪れはいつになるだろうか？林業界にも春風が吹きつつある▼新聞記事に目が止まった。「若者、林業に熱視線」東京で開かれた林業の就職相談会に林業や森林に関心があり、就職活動中の若者らが参加し、相談者は1000人近くに達したそうである。最近では森林の仕事に将来性を見いだし山の仕事を始めた「林業女子」も増えていると聞く▼国土交通省によると昨年も住宅着工戸数が前年を上回り高水準と報じている。また、本誌1月号にあった「CLT（直交集成板）」スイスでは昨年、日本人建築家による7階建て木造ビルが完成したそうである。日本では国が、2020年東京オリンピック施設への活用に向け動き出した▼取り巻く環境は明るい春を予感させるが、この春は待っていては巡ってこない。民・国連携したこれからの取り組みが肝要だ。（一）